中高ドイツ語構文“beginnen+Inf.”のいくつかの局面

0 問題提起

筆者は以前『一橋論叢』⁽¹⁾において、中高ドイツ語の“beginnen+Inf.”構文についての考察を行なった。その結果、現代ドイツ語の類似構文“beginnen+zu+Inf.”が「恒常性をもたない未完了相」あるいは「瞬間的でない完了相」のアスペクトをもつ動詞を「し始める」と日本語に訳すことが可能な「始動相」に転ずる機能をもつのに対し、中高ドイツ語構文“beginnen+Inf.”は「完了相」のアスペクトをもつ動詞を「未完了相」に転換するという（現代語とは異なる）役割をもっているのではないかと考え、この仮説の傍証として現代語ではbeginnenと共起しにくい知覚動詞（特に「自発」の意味をも

清水 朗

つもの）や「瞬間的性質をもつ完了相」をもつとされる動詞が中高ドイツ語ではbeginnenと共起している例をとりあげた。さらに、それ自体としてすでに未完了相である「状態動詞」とbeginnenが共起する理由として、「状態動詞」のみによる構文は、始点・終点とも考慮に入れない純粹な「状態」を表現するのに対し、beginnenを含む構文は、ある時点の行為・状態変化の結果としての「状態」を表す、つまりは、二つの構文に意味上の差異があるためではないかと考えた。前者と後者の差異は例えば現代語の“Das Fenster war offen.”と“Das Fenster war geöffnet.”の間に見られる差異とパラレルなものと考えられる。

本稿では、前稿で Das Nibelungenlied と Hartmann

von Aue の諸作品(以下「ハルトマン」と略記)に限ったコーパスを Gottfried von Straburg の Tristan und Isolde と Wolfram von Eschenbach の Parzival にまで広げ、より多くの文例を参照した上で、知覚動詞や「発語」の動詞などいくつかの意味グループの動詞群と beginnen が共起している例をより詳しく考察することによって右の仮説の補強を行い、さらに中高ドイツ語での beginnen がもっていたと思われるアスペクト的な機能と han や sin が助動詞として用いられ、いわゆる「完了形」を作るとされる際の機能との比較を試みる。その際、前稿では扱えなかった「主文——副文」関係における beginnen の機能などについての考察も行いたい。

1 コーパス中の“beginnen+Inf.”用例の概観

Das Nibelungenlied とハルトマンの諸作品中で beginnen がどのような動詞とどのような頻度で共起しているかは前稿で示したが、ここでは同じ基準に従い、Tristan und Isolde と Parzival を含めた上での結果をまず示しておく。

- 1 「発語」に関するもの…NL 三十五例、ハルトマン 四十五例、TR 十五例、PZ 二十一例
- 2 「発語」以外の「能動的行為」のうち「場所の移動」に関するもの…NL 十九例、ハルトマン 三十一例、TR 二十七例、PZ 二十二例
- 3 「感情(の表出)」に関するもの…NL 四十一例、ハルトマン 五十二例、TR 二十一例、PZ 二十一例
- 4 「思考」に関するもの…NL 一例、ハルトマン 五例、TR 四例、PZ 二例
- 5 「状態変化」に関するもの…NL 一例、ハルトマン 二例、TR 十二例、PZ 一例
- 6 「自然現象」に関するもの…NL 四例、ハルトマン 五例、TR 三例、PZ 一例

計 NL 百一例、ハルトマン 百四十例、TR 八十二例、PZ 六十八例

(総例数…NL 百五十六例、ハルトマン 二百二十例、TR 百九十一例、PZ 百二十八例)

1~6 の分類基準は、現代ドイツ語で beginnen とし、ばしば共起する動詞の意味特徴を基に定められたもので、大まかな目安にすぎない。事実、これらのグループに含

まれないものとして、「見る」(sehen, schauenなど)ことを中心とした「知覚」あるいは「認識」に関わる動詞群が存在する(NLで六例、ハルトマンで十三例、TRで二十四例、PZで十例)。裏を返せば、これらは現代ドイツ語ではあまり見られない用例だとらうことでもある。また、前稿でも指摘したことだが、例えば「発話」に関する動詞群の中でも *vrägen* や *biten* とらった「要求」の意味をもつ動詞の例数が多いなど、右の表に現れていない現代語との相違にも留意すべきである。

このため本稿では、1-6のグループに属するか属さないかに関わらず、現代語との対比上興味深いと思われる例をとり上げ、それらを前稿よりも詳しく吟味することから始めることにする。

2 「場所の移動」に関する動詞群

「場所の移動」に関する動詞は例数もかなり多い(総計九十九例)が、とりわけ注目に値するのは *sehen* (急ぐ:二十三例)と *nähen* (近づく:十二例)の二動詞の出現回数が多いことである。現代語ではこれらの動詞が *beginnen* と共起することが——もし可能であるととして

も——これほど頻繁に起るとは考えにくく。まずはいくつかの例を挙げよう。

(gähen)

(1) *si begunde ir sprunges gähen/ von dem pferde diez gras.* (Pz 779, 20—21)

(2) *si begunden vaste gähen/ dz der burc mit schalle.* (Pz 620, 24—25)

(3) *die begunden mit aller ir kraft/ gegen ir herren gähen.* (Gr 2150—2151)

(4) [...], */si begunden dar gähen/ wand si si gerne sähen/ so vruntlichen gebären.* (Iw 7511—7513)

(5) *zuo dem videlaere/ gähen er began.* (NL 2040, 3—4)

動詞 *gähen* は殆どの場合、方向規定(下線部)を伴っている。*gähen* のみによってはどのような行為が行われたかは示されず、それは方向規定あるいは他の副詞句(例(1)における *ir sprunges*)によって間接的に表現されるにすぎない。そして *gähen* はこれらの行為が「早急に(*schleunigst*)」行われたという、むしろ意味

的には副詞に近き役割をもちつつあると主張される⁽⁶⁷⁾。これらの表現は *beginnen* を伴うことにより、ある目的地点に向から「急いで」「早く」という過程が未完→相を示していると考えられるのである。ゆえに *dō* (いつ) 時に) を伴う、他の行為との同時性を表現している場合がある。

(6) *dō* er in begunde gāhen nā, / *dō* kam er rehte uf ir slā, von den im schade was geschehen. (Er 160—162)

(7) *Dō* si den gast ersāhen, / *dō* begondes gāhen, / diu vrouwe unde der herre, / *en-gegen im genuoc verre* / [...] (Iw 6471—6474)

例(6) (7) では *beginnen* を伴う *gāhen* が他の(完了相の動詞で表される)行為が行われた時に背景としてあった状況(状態)を表していると考えるのが自然だと思われる。

(nāhen)

(8) *und als daz schif begunde / Irlande also genāhen, / daz si daz lant wol sahen, / Tristan*

den sturmeister bat, / daz [...] (Tr 7394—7397)

(9) *nū sime begunden nāhen, / hōfliche er uf gein in spranc, / sine schoene hende er vür sich twanc. (Tr 2672—2674)*

(10) *wan swen sîn ougen sāhen, / sō er dem begunde nāhen, / den gruozte der knappe guoter, / und jach 'sus riet min muoter.' (Pz 138. 5—8)*

nāhen は「近く近づく」という意義からして、近づく対象が必然的に表現されねばならず、実際殆どの例に方向を示す格名詞(下線部)が現れ、ちよなればそれは文脈より明かとなった。 *gāhen* と同様に *nāhen* において「*nā*のようた」「*nā*かにして」といった状態は問題とならず、二者間の位置関係のみが示される。注目すべきは、多くの場合に *als, nū, sō, die wile* といった時間的並行性を表す接続詞に率いられる副文中に *nāhen beginnen* が現れ、やはり *gāhen* の場合と同様完了相の定動詞(例(8))では *bat* (例(9))では *spranc* (例(10))では *gruozte—jach*) を伴う

本文の「背景」をなしていると考えられることである。

このように *gähen*, *nähen* の二動詞に共通している点は、両者とも動作の様相を表すことなく、二者間の位置関係、あるいはそれに伴う速さに焦点をあてている点である。分析的というより一般的で希薄な意義特徴のため、*beginnen* と共起することによってこれらの動詞が未完了相となり、「背景」としての「状態」を表現する場が多くなっているのではないだろうか。⁽⁶⁾ こう考えると、他にも二者間の位置関係に焦点をあてて *volgen* (二例)、『*entwischen* (七例)』、『*kären* (四例)』や副詞の *näch* (一の後二) を伴う動詞表現 (*näch loufen*, *näch riten*) が比較的多く見出される理由もわかるのであろう。

- (11) *Dē im begunde entwischen/von houbte*
der dōz, /den er ē dā dolte/von dem slage
grōz, /er dāhte: [...] (NL 2048. 1—5)

3 「知覚」・「認識」に関する動詞群

次に *sehen* や *hören* に代表される「知覚」や「認識」に関する動詞群を考察する。これは前述の1〜6グループ

プのいずれにも属さないもので、現代ドイツ語で *beginnen* との共起は——あったにせよ——非常に稀だと思われるものである。

ただし「知覚」といっても、ここでは現代ドイツ語の *sehen* に見られるように、「見る」という能動的な行為を表す場合と、「見える」という、日本語文法でいう「自発」を表す場合がある。実際、本稿用のコーパスの中で *sehen* が *beginnen* と共起している全九例のうち、「自発」の意味に解釈できるものが七例を占めている。この二つの一部を示す。

- (12) *nū Tristan den künec sehen began, /er*
begunde im wol gevallen/vor den andern
allen: (Tr 3240—3242)
- (13) *Gahmuret begunde sehen/ah vanen swi-*
men gein der stat, /die er balde wenden bat/
Den klänen sigelösen man. (Pz 41. 30—42. 3)

- (14) *nū was er komen af ir slā/und ilte in vil*
sēre nā/ūnz er si begunde sehen an. (Er 5378
—5380)

どれも現代ドイツ語では *beginnen* が使われないと思わ

れる例だが⁽⁸⁾、ここでもしばしば *nu* や *do* などの時間的並行関係を表す語によって *sehen beginnen* がもう一つの「状態」と対比されたり(例(12)⁽⁹⁾)、もう一つの「行為」(例(13)では *bat*、例(14)では *was kommen* — *itte*)の「背景」となっていると考えることができる。

さらに次の二例は本稿の主旨からしても特に注目すべきである。

(15) *vil schiere wart, daz Tristan/hunde unde jegere sehen began*; (Tr 5337—5338)

(16) *vil schiere wart, daz si began/den ernst an in beiden sehen/und uzen an ir libe spehen/den inneren smerzen/ir muotes unde ir herzen*. (Tr 12058—12062)

例(15)′(16)の双方におうて *sehen beginnen* は *daz* に率いられた副文中にあると見なせるが、主文はそれぞれ “*vil schiere wart* (すくなくとも) ことが成った[起こった]” と *werden* を用いた典型的な「状態変化」の表現である。「状態変化」は完了相をもつものなので、*daz* 以下の表現も完了相であるとしたら重複と

なってしまうが、*vil schiere wart* をつけ加える必要性がなくなってしまう。つまり、このことから副文中の *sehen beginnen* は未完了相で、それを完了相へと転じるために主文で *werden* が用いられているのだと考えることができるのである。

次に *sehen* と同様、*beginnen* とともに用いられることの比較的多い *schauwen* の例を見つみる。 *schauwen* は *sehen* と異なり、意図的に「見る」という意味で用いられることが多く。

(17) *Gâwân begunde in schouwen, /dô er derzuo kom geriten*. (Pz 505. 2—3)

(18) *nun er wider in zen vrouwen gie/und sin begunden schouwen, /nû begunden in die vrouwen / durch ir gedanke lazen gan*. (Tr 10846—10849)

(19) *al stênde bi der vrouwen/daz marc begun-der schouwen*. (Pz 530. 21—22)

(20) *daz hns er schouwen begunde/und erwânde nint daz er vunde / ieman dar inne*: (Er 260—262)

例(17)―(20)も「見始める」のでなく、しばしば do (例(17))、nu(u) (例(18))や現在分詞による分詞構文(例(19))で表される他の行為と時間的に並行した、「見ていた」・「眺めていた」といった状態(背景)を表現していると考えられる。

sehen と schauen 以外の「知覚」・「認識」に関する動詞も、ある時は「意図的」に、ある時は「自発的」に解釈されうる。

- (21) nu siz do vollebrachten, /so daz Tristan daz spil gewan, /und er sich umbe sehen began, /do sach er wol, wiez was gevarn. (Tr 2318—2321) (意図的)

- (22) nu die inneren begunden/ir lantbaniere erkennen, /ir zeichen hoeren nennen, /si begunden ir rûm witen, /uz an die wite riten. (Tr 5584—5588) (自発的)
- (23) er hörte wazzer giezen/ (losen er began) /in einem schoenen brunnen; (NL 1533, 3—5) (意図的)

「意図的」にせよ「自発的」にせよ、*nu, do* など

ど時間的並行性を示唆する語が頻繁に現れ、beginnen を伴う表現がやはり「背景」を表していると考えることが出来る。また、例(22)では先行する副文と後続の主文の両方が *beginnen+Inf.* を伴っており、⁽¹⁰⁾ここでは二つの「背景」が並列されているといえるだろう。

このグループに属する動詞の意味特徴から言っても、「見える・見ている」といった「状態」が、前項で述べたように *beginnen* を伴うことにより、その「開始」を念頭においた上での「状態」の表現となり、「見えている」・「知覚されている」モノが他の行為の「背景」となるのは自然な傾向であると思われるのである。

4 「発話」に関する動詞群

sagen をはじめとする「発話」に関する動詞が *beginnen* と共起するケースは計百十六例ときわめて多いが、その中でも「言う」ことそのものを意味する *sagen* (二十例) や *jehen* (十一例) と並び、「要求」の含意をもつ *vragen* (二十二例) と *bien* (九例) の例数の多さが目をひく。これは何によるものだろうか。まずこの点を考えてみたい。

(vrågen)⁽¹¹⁾

(24) der helt si vrågen began/umbe ir site und umb ir pfege, / 'daz ir sø verre von dem wege/sitzt in dirre wilde [...] (Pz 438. 22—25)

(25) Der wirt an allez bāgen/begunde in fürbaz vrågen / 'neve, noch hān ich vernehmen/wannen dir diz ors si komen.' (Pz 500. 1—4)

(26) Der bote begonde vrågen : / «waz ist hie getān ?» (NL 2242. 1—2)

(27) Erec der junge man/sin vrouwen vrågen began/ob erz ervarn solde. (Er 18—20) (biten)

(28) si begunden in dô alle bitn/daz er gelobte sunder/den von der tavelrunder/sin ritlich gesellekeit. (Pz 308. 26—29)

(29) si begonden urloubes/die küneginne biten, /wan si wider wolden/riten an den Rin. (NL 1291. 3—6)

(30) der wirt begund in starke biten / (daz waer alsô guot vermieten)/daz er dā ruowen wolde : (Iw 5093—5095)

vrågen と biten の場合、質問や依頼を向ける相手が対格の名詞で表され、質問や依頼の内容が属格名詞で表現される。結合価の観点からすると対格名詞が vrågen では随意的補足成分、biten では義務的補足成分と考えられるが、⁽¹²⁾vrågen の場合でも対格名詞はかなりの頻度で現れてゐる。⁽¹³⁾しかし、こうした純粹に統語的な側面を離れると、biten はもとより vrågen も「質問を向ける相手」が意味的に前提されており、たとえそれが対格名詞で表現されてなくとも文脈から特定されうるのである。つまりこれら二動詞は「発話」そのものよりも、むしろ発話内容の「伝達」の側面に焦点をあてるものである。⁽¹⁴⁾さらに vrågen は何らかの「ト」を相手から聞き出すために行なり、biten は何らかの「モノ」(あるいは「行為」)を相手から得るために行なう、⁽¹⁵⁾すなわち双方とも相手の反応をも視野に入れた行為であるという点で共通している。つまり二動詞とも「二者間の(相互)関係」なしにありえないという意味で、本稿第2項であれ

た gâhen, nâhen 等の「場所の移動」に関する動詞群の一部と類似性をもつものなのだとはいえる。

「二者間の関係」という観点からいえば、典型的な「発話」関係の動詞と考えられる sagen および jehen が現れる文におおむねしばしば与格文詞で「発話の向けられる相手」が表される。

(31) sus begund im ein knappe sagen. / des
ors zen sifen was durchslagen. (Pz 203. 15—

16)

(32) dô begunde im der wirt jehen/wiez umbe
die rede was getân, /als ich iu gesaget hân, /
beide umbe die hochzit/und ouch des spar-
waeres strit. (Er 451—455)

sagen と jehen の前述のよびに beginnen と共にする回数が多い動詞であるが、このにおける「二者間の関係」が「話し手→聞き手」という一方向的 (→) であるのに対し、vrâgen, biten の場合は相手の反応をも視野に入れているという点で、(少なくとも潜在的には) 双方向的 (↔) である、という違いがある。

一方向的・双方向的のいずれにせよ、vrâgen・biten

および sagen・jehen は「二者間の関係」を含蓄するという意味上の性格より、beginnen と結びつくことにより、様々な出来事が「前景」で起こる舞台の「背景」としての「状態」を示すことが多いのだと考えられることができるだろう。そしてこの事態は、動きを表す動詞群の中で gâhen, nâhen とした動詞がやはり同様に「背景」をなしていったこととインラルトに把えることができるのである。このことはまた、「場所の移動」や「知覚」・「認識」に関する動詞群と同様、dô 等の接続詞を用いて二つの「状態」の時間的並行性が示されたりする場合もあることからも窺えよう。次の二例を参照されたい。

(33) Dô der künic Sigemunt / wold sîn ge-
rien, /dô begonden Kriemhilt/ir mäge
biten, /daz si bi ir muoter/solde dâ bestân.
(NL 1077. 1—6)

(34) dô man begunde vrâgen/ die minnecl-
chen meit, /ob si den recken wolde, /ein teil
was ez leit, /unt dâhte doch ze nemene/den
waetlichen man. (NL 1684. 1—6)

5 「感情」に関する動詞群

前項で指摘したように、現代ドイツ語では *beginnen* は *lachen*, *weinen* のように感情が外に向かって「表出」される意味をもつ動詞と共起するものの、中高ドイツ語ではそれに加えて怒りや悲しみ、不安・恐れ、欲望・愛など、内面的感情を表す動詞とも共起する場合は多いのは注目に値する。改めて本稿のコーパスの中から内面的感情を表す動詞群を意味別に分け、*beginnen* との共起回数を示そう。

怒り・憎しみ (zürnen, toben, hazzen 等)	十四例
悲しみ (trüben, trüben 等)	九例
不安・恐れ (sorgen, fürchten)	四例
欲望・愛 (gern, minnen 等)	九例
興・不興 (gefallen, missefallen)	三例
苦痛 (kumber tragen, leiden)	二例
恥辱 (sich schemen)	一例

計 四十二例

これらは、感情の表出を表す動詞中で最も *beginnen* と共起する回数が多い *Klagen* (十九例) よりも個々の動詞数としては少ないものの、全体としてはかなりの数に上ることがわかる。

これら内面的感情、つまりは様々な心の「状態」を表す動詞はアスペクトとして未完了相をもつ。前稿ではこれらが *beginnen* を伴うと「ある「行為」あるいは「状態変化」の結果としての「状態」という含意をもつ(やはり未完了相のアスペクトをもつ)表現になると考えた。⁽¹⁶⁾ただし、そうだとすると *beginnen* との共起がこれほど頻繁に見られるのは何故だろうか。このことをまず実例に即して考えてみたい。

(35) und sô si des gern began, /sô machte si den man/ze vogele oder ze tiere. (Er 5184—5186)

(36) urloubes begunden si sô gern/unz er sis muoste gewern. (Er 3642—3643)

(37) si begunde trûren/um ir liebez kint, /daz vorhte si verliesen/von Gunheres man. (NL 60.3—6)

- (38) Swie blide er pfege der zühle/und swie schoene si sin lip, /er möhte wol erweinen/vil waeltichen wip, /swenn' er begonde zürnen. (NL 415. 1—5)
- (39) nu Tristan den künec sehen began, /er begunde im wol gefallen / vor den andern allen; (Tr 3240—3242)
- (40) da begunde sich manc herze senen/nach Tristandes vuoge. (Tr 3704—3705)
- (41) der gast begunde sich des schemn, / Iedoch kuster se an den munt. (Pz 176. 8—9)
- このグループには様々な動詞が含まれ、また構文上の位置も主文あるいは副文に含まれるなど、一様には語れない。ただし一般に「感情」に関する動詞はその「感情」(喜び、怒り等)の対象を留意しており、それは例(35)の“des”や例(37)の“um ir liebez kint”、例(40)の“nach Tristandes vuoge”のよう¹⁷⁾に明示的に示される場合もあれば、コンテクストによって間接的に示される場合もある。いずれにせよ、ここにおいても一般的には「感情」の持ち主とその「対象」という「二者間の関

係」が前提とされて「らむ」とい¹⁸⁾、まず注目したい。さらに例(38)における“swenn' er begonde zürnen (彼が怒っていた時にはらむも)”や例(35)の“sô si des gern began (彼女がそのことを欲していたならば)”のように、副文中にbeginnenと共に現れ何かの「条件」となっている場合も多い。

つまり、やはりこのグループの動詞も一般的に「動き」や「発話」に関する動詞群と同様「二者間の関係」を表しており、それがbeginnenと共起することによって、他の事象の「背景」として機能する¹⁷⁾場合が多いのではないかと考えられるのである。

6 前項までの考察のまとめ

中高ドイツ語の“beginnen+Inf.”構文はアスペクトの点で完了相の表現を未完了相に変える機能があるのではないかという前稿の仮説に基づいて、「場所の移動」・「知覚・認識」・「発話」・「感情」に関する動詞群がbeginnenと共起する例をより詳しく考察・吟味してきた。これらのグループは現代ドイツ語ではbeginnenと共起することが不自然と感ぜられるにもかかわらず、コーパ

ス中では出現回数の多いものであった。

意味の上ではグループごとにかんがりの違いが見られるものの、「移動」・「発話」・「感情」のグループでは「二者間の関係」が前提となっており、そのため *beginnen* と共起することによって何らかの他の出来事の「背景」となることが多いのではないかと考えた。また「知覚・認識」のグループも、*do* や *no* などの時間的並行関係を表す語をしばしば伴うことから、やはり *beginnen* と共起し、「背景」としての機能を果たしていると思われる。⁽¹⁸⁾

7 *beginnen* と *haben/sein*

—— 結語にかえて ——

ところで、*beginnen* が「完了相→未完了相」というアスペクト変更の機能をもつとみた場合、そこには「*haben/sein*+過去分詞」の形式をとる、いわゆる「完了時制」との親縁性が認められる。

「完了時制」とはいくものの、現代ドイツ語においてもそれが「過去時制」と同様の純粋な時制を表すのかと云かには異論もあり、「完了時制」のもつ機能にはなお

一致した見解がないといえよう。⁽¹⁹⁾ さらに中高ドイツ語に遡った場合、*haben* や *sein* が完了の助動詞というよりも、本来の「*く*をもった状態である」「*く*をした状態である」という色合いがまだかなり強く残っていると考えられる。

(42) *Ich habe das Buch gelesen.*

現代ドイツ語では例(42)の動詞部は「現在完了形」と普通呼ばれるが、本来これは「*Ich habe das Buch als Gelesenes.* (私はその本を読まれたものとしてもっている)」⁽²⁰⁾ という「状態」を表す表現に発している。同様に、

(43) *Er ist gelaufen.*

は「*Er ist einer, der gelaufen ist.* (彼は走った)」「*er ist gelaufen*」⁽²¹⁾ である。「走った」「*er ist gelaufen*」⁽²²⁾ というやはり「状態」の表現が原義であり、これは古高ドイツ語の段階でははっきりとしているが、中高ドイツ語にもその起源がかいま見られる例にしばしば出会う。

(44) *du möhstes wol gedaget han, / und waere*

dir ere liep. (NL 849, 3—4)

名譽が大切ならば、あなたは黙っているべきだっ

たのです。

例(44)では、「それ(es)」について「黙ったままである(gedaget han)」という「状態」が「望ましい(möhte)」と表現されているが、これは現代ドイツ語には直訳不可能である。このように、特に語法の助動詞を伴う用例に haben/sein (han/sin) に関する現代語との違いがはっきりと読みとれる。

そうだとすると、(現代ドイツ語はさておき) 中高ドイツ語に関する限り、haben/sein と過去分詞からなる構文は lesen, laufen と同じた完了相の動詞を未完了相に転じると同じ意味で、beginnen と共通の性格をもつことになる。勿論 haben/sein は「行為あるいは状態変化の結果」としての「状態」を表すのに対し、beginnen は「行為あるいは状態変化の継続」としての「状態」を表す⁽²²⁾、という違いはあるのだが、ともに「アスペクトの変更に関わる助動詞」としての性格をもつという点で同一線上で語ることが可能だと考えられるのである。

引用したテキストは以下の略号で示してある：NL=Das Nibelungenlied, Er=Erec, Gr=Gregorius, Iw=Iwein,

Tr=Tristan und Isolde, Pz=Parzival

(1) 拙稿「中高ドイツ語構文“beginnen+Inf.”について」(橋大学「橋学会編集」『橋論叢』第一一五巻 第三号、一九九六年、六一―七五頁)。以下「前稿」とする。

(2) 本稿のためのコーンヌの例文は次の版から集めた：Das Nibelungenlied, nach der Ausgabe von Karl Bar-tsch, hrsg. von Helmut de Boor, Wiesbaden²¹1979; Hartmann von Aue, Der arme Heinrich, hrsg. von Hermann Paul, besorgt von Ludwig Wolff, Altdutsche Textbibliothek Nr. 3, Tübingen 1972; Hartmann von Aue, Gregorius, hrsg. von Hermann Paul, besorgt von Burghart Wachinger, Altdutsche Textbibliothek Nr. 2, Tübingen 1984; Hartmann von Aue, Erec, hrsg. von Albert Leitzmann, fortgeführt von Ludwig Wolff, besorgt von Christoph Corneau und Kurt Gärtner, Tübingen 1985; Hartmann von Aue, Iwein, hrsg. von G. F. Benecke/K. Lachmann, Neubearbeitet von Ludwig Wolff, Bd. I, Berlin 1968; Gottfried von Straburg, Tristan und Isolde, hrsg. von Friedrich Ranke, Berlin 1958; Wolfram von Eschenbach, Parzival, hrsg. von Gottfried Weber, Text, Nacherzählung, Worterklärungen, Darmstadt 1963.

(3) 拙稿「中高ドイツ語構文“beginnen+Inf.”について」六三九頁以下参照。

(4) 同右六三七頁参照。

- (5) 現代語訳ではその都度 *steigen auf*、*springen von*、*auf* など行動の様式を示す動詞を用いている場合が多い。
- (6) 「背景」としての未完了相とは、例えばフランス語の半過去 (*imparfait*) が複合過去 (*passé composé*) や単純過去 (*passé simple*) に対してのみ関係にも見られる。
 “Quand j'étais petit, j'ai vu (ある日は *je vis*) un gros ours. (僕が小さかったとき、大きな熊を見た)”
- (7) この例のように比喩的な用法の場合も、(1) やはり心理的距離が問題となっており、(2) 接近あるいは遠ざかる対象 (ここでは *im*) が明示される、という点で以上の議論を適用できると考えられる。
- (8) 事実、現代ドイツ語訳者達は例 (12) を “Als Tristan den König sah, gefiel er ihm besser als alle anderen.” 例 (13) を “Als er sah, daß dennoch hinter acht fliegenden Fahnen Heerhaufen gegen die Stadt vorrückten, [...] *er* beginnen *er* nutzen *er* rief *er* *er*.” (現代語訳は以下のものを用了た: Gottfried von Straburg, *Tristan*, Bd. 1. Nach dem Text von Friedrich Ranke, neu herausgegeben, ins Nhd. übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, Stuttgart 1981; Wolfram von Eschenbach, *Parzival*, Bd. 1, Mhd. Text nach der Ausgabe von Karl Lachmann, Übersetzung und Nachwort von Wolfgang Spiewok, Stuttgart 1981)
- (9) ここでは主文にも *beginnen* が使われていることに注意。
- (10) この構文は例 (22) が唯一の例ではない。他に Pz 7547—7552 *er war nemen *er* versmahen* がやはりそれぞれ前文と後文で *beginnen* と共起している例などがあげられる。この構文の性格はもう少し深く考察すべきかもしれない。
- (11) 因みに、本稿のためのコーパス中に *beginnen* が *ze Inf.* と共起している例が一例あったが、その不定詞部は *vragen* である。
- “*ze vragen er begunde, / ober wolde baneken rten:* (Pz 29, 30—30, 1)”
- (12) 拙稿「Mhd. 動詞結合価と属格補足成分——与格あるいは対格と共起する場合に関して——」(東京大学文学部ドイツ文学研究室 詩・言語同人会「詩・言語」第28号、一九八六年、一四—三二頁)、三三頁以下参照。
- (13) コーパスにおける全三十一例中十三例。
- (14) これは例えば *sprechen, reden* といふた動詞が「発話」そのものの方に重点をそむいているのと対照をなしている。
- (15) 拙稿「Mhd. 動詞結合価と属格補足成分」二八頁参照。
- (16) 拙稿「中高ドイツ語構文 “beginnen + Inf.” に ついて」六四七頁以下参照。
- (17) このグループの動詞が *beginnen* と結びついた複合形式語は、実際には構文的に様々な位置に現れるので必ずしも

「背景」を表していると考えられるケースのみではない。ここではあくまでも他の動詞群との関連から推測できることを述べるにとどめる。

(18) 因みに、現代ドイツ語で *beginnen* 同様 *zu-Inf.* と結びつき「し始める」訳されることの多い *anfangen* (Mhd. *an[ic] vāhen*) の同時代での用例を見ると、次の二点に気づく。

I 大抵の場合対格や前置詞格の名詞句と結びつき、動詞の不定詞と結びつくケースはコーパスの中ではなしに一例あるのみであった(その際²⁶⁾は伴わなかった)。

II “wie(いかに)”に先行された疑問文や副文中に現れる場合が多い。つまり、事柄がまだ遂行される前か、あるいは遂行されたにせよ、文脈上ではまだどのように遂行されたかが分からない場合が多い。

これらの点につき、次に示すいくつかの例を参考に考えてみる。

- a) *der garzûn dan lief oder gienc: / nu hoeret wiez Oble an vienc.* (Pz 360, 29—30)
- b) *got rât mir armen wibe/wie ich ez ane vāhe/ daz ich mich niht vergāhe.* (Er 3371—3373)
- c) *sô sul wir ane vān/dienen schoenen wiben/für den palas wlt.* (NL 599, 4—6)
- d) *Dô sprach aber Ruedegêr: /wie sol ichz ane vān?* (NL 2159, 1—2)

e) [...] /ine wiste wie gevāhen an, /daz ich von richete/so guotes iht gesette, /manc haete baz da von geseil. (Tr 4612—4615)

wie が副文を導いたり(例 a)、b)、直接に疑問詞として用いられたり(例 d)、また助動詞 *sul* が未来を指示する場合(例 c)、d) など、統語環境は様々であるが、いずれにせよ「着手される」事柄の様態はいまだ語られていない。さらに、意味的には *ane vāhen* の原意に近い *angreifen, tun* の色合いが強く残り、殆どの例は *tun* による置き換えが可能であるように見える。例 c) はコーパス中で *ane vāhen* が不定詞(ここでは *dienen*) と共起する唯一の例だが、ここでは *tun* による置き換えが(強調形として)可能かも知れない。また *wie* 以下の文や、*sul* を伴った文を未完了相と解釈するのは難しいという事実にも気づかされるのである。

このため Mhd. “*an(e) vāhen*” は機能上・意味上ともに Mhd. “*beginnen*” と同列に論じる訳にはいかず、アムスナクトの観点から言えばむしろ完了相に関連するのだと言えるだろう。

(19) 「過去」や「現在完了」などの時制については Hans Reichenbach 以降、様々な論議があるが、ここでは深く立ち入らなず。また(形式的には)時制の一種と見なされる「完」(perfect)形式、アムスナクトの区分では「完了相(perfective)」と混同してはならぬ(cf. Bernard Comrie, *Aspect*, Cambridge 1976, p. 62)。²⁷⁾ この「完」

うとじつするのめ haben/sein のひマヌスクト上の役
割であって、時制上の役割はない。

(20) Vgl. Heinz Rupp, Zum deutschen Verbalssystem
(In: Neuphilologische Mitteilungen 66, 1965; Neuge-
druckt in: Sprache der Gegenwart 1, 1967, S. 148—
164), S. 161.

(21) 当然、現代ドイツ語では“*du hättest besser geschwie-
gen*”と書いた接続法第二式を用いる必要がある (vgl.
Das Nibelungenlied, S. 143, Anm.)。

(22) この点ではむしろ英語の「進行形 (progressive)」に
近づいた方がよい。

(一橋大学助教授)